

## 資料

## 「乳幼児施設の子どもの生活」についての考察

## —生活者としての保育者のあり方—

梅原 健吾<sup>\*1・2</sup>・小田 進一<sup>\*3</sup>

(2022年2月3日受稿)

## 1. はじめに

子ども達にとって乳幼児期は人格形成の基礎を培う大切な時期である。倉橋は保育の基本を「生活を生活で生活へ」<sup>1)</sup>と述べており、保育所保育指針・幼稚園教育要領等においても「子どもの最善の利益を考慮し…最もふさわしい生活の場でなければならない。」<sup>2)</sup>「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。」<sup>3)</sup>と生活の重要性について記されている。実践面においての生活の確認を行い、生活の中から育まれる可能性や、生活における保育者のあり方がどうあるべきなのかを問い直す必要があるだろう。

## 2. 研究の目的と方法

乳幼児期に自己選択や自己決定を行い、主体的に行動することで、子ども達は「自分」をつくっていくことが重要である。教育基本法第11条は、「幼児期の教育は、生涯の人格形成の基礎を培う重要なもの」<sup>4)</sup>と規定し、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説は、環境を通して行う教育及び保育の意義として「生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自ら興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければならない」<sup>5)</sup>と示している。筆者が年長組の担任として勤務するH子ども園においても、『自らを生きる』を教育理念とし、将来にわたってたくましく生きる「自分」

をつくる教育を目指している。

しかし、目の前の子ども達は主体的に生活しているのだろうか。そもそも、当たり前に使われている『生活』とは一体何かを整理する必要があるだろう。

また、誰が園生活を営むのかという視点から、日々の保育を振り返ることで、現在の園生活に対する課題を洗い出し、丁寧に見つめ直していくことが大切だと考えた。

そこで本研究では、筆者の考える「生活」を定義し、その視点から日々の保育をどう捉えられるのかを検討する。これらの課題を、学年内の保育者達はどう捉えているのか、自由記述式のアンケート調査を行い、その結果から生活者としての保育者のあり方について考察したい。

学年内の生活に係る保育者に対する聞き取り調査の内容は、以下の通り。

調査期日:令和4年1月10日～18日

対象:筆者が担当する年長組の学年内保育者

①担任1名

②AT (アシスタントティーチャー) 1名

③ST (サポートティーチャー) 1名 計3名

※担任・ATは有資格者

回答方法:自由記述式

## 3. 生活とは

筆者は「生活」を考える時、園内で過ごす時間を生活とするのではなく、朝起きてから寝るまでの1日を生活として捉えていきたい。子ども達が

\*1 はやきた子ども園 \*2 北海道文教大学大学院こども発達学研究所修士課程

\*3 北海道文教大学大学院こども発達学研究所

家庭でどのように過ごしてから園へ来ているのか、降園した後は家族とどう過ごしているのだろうか。それぞれの家庭によって過ごし方は異なるであろう。一人ひとりが異なった生活リズムを送る中で、唯一同じ生活の流れを過ごしているのが子ども園である。子ども園として、目の前の子ども達を見てどう生活を営むことが望ましいのか、子ども達の気持ちや背景を考慮したふさわしい生活の場を考える必要があるのではないだろうか。しかし、当たり前に使われている「生活」という用語は、漠然としているため、以下に具体的に示す。

小川(2010)は「生活」を成立させている条件として、物質的諸要素は時代とともに変化してしまうのに対し、「生活」する側(人間)の意識には、「生活」を「生活」として認知する共通な意識があると述べている。幼稚園教育要領では、保育者と子どもが共に「生活を創っていく」ということを示す「より良い教育環境を創造する」という文言がある。ここで問題になることは、両者の共通の「生活」条件を用意することではなく、両者に共通の「行動様式」を通して、共通の「生活」感覚を確立することである。<sup>6)</sup>

「生活」感覚を語る際には2つの概念があると述べている。1つは習慣であり、もう1つは慣習である。前者は「あることを繰り返し行った結果、そのことをやろうと意図しなくとも、行動として繰り返されること(しきたりになること)」と規定し、後者は「ある社会で歴史的に成立、発達し、一般に認められている、伝統的な行動様式や概念、ある社会に一般的に認められているならわし」と規定する。つまり、前者が個人レベルのしきたりであるのに対し、後者は集団(社会)レベルで確認されているしきたりである。<sup>7)</sup>

人によって異なるが、例えば、朝起きて、顔を洗い、朝食を摂る…といった一定のパターン行動がある。しかしある時、寝坊してしまいそのペースに狂いが生じた時、気分が悪くなるであろう。つまり、日常的パターン行動の持つ心理的影響が

多かれ少なかれだれにでもあり、それが個人レベルの行動(習慣)であるにとどまらず、社会、集団レベルの行動としての側面を持っている。つまり、慣習によって支えられている。慣習というのは、個々人の習慣が他者の習慣と共通したものである。したがって、慣習に対してもつ個々人の意識は、それに従うことでお互いに容認し合えるという意識(イメージ)を持つことになるのである。<sup>8)</sup>

日常の「生活」行為は、この習慣の独自性とその習慣のもつ慣習としての側面に支えられて成立している。そして、「生活」の快適さ(不快でない)の意識も、習慣の固有性と慣習性に支えられ成立している。日常のパターン行動に含まれているこの2つの側面の関係のあり方の中で一人ひとりの「生活」スタイルが決定されてくるのである。

園生活において、3歳以上児の一人ひとりの習慣は、日常生活の自立と捉えられるであろう。特に5、6歳児に関しては、発達段階からも社会への関心が強まっていく時期でもあり、集団生活を送る上では、友達と楽しく過ごすためのルールを守りながら過ごす(慣習)必要性を学んでいく。しかし、一人ひとりの習慣を、集団生活の慣習に当てはめることは容易なことではないだろう。また、この考え方であると集団生活の慣習に、子ども達の習慣を強引に当てはめようとしていることになる。『自らを生きる』という教育理念の元、子ども達が生活の主体者として過ごすという思想からはかけ離れた生活となってしまふ。したがって、習慣と慣習の関係性は強弱をつけるわけではなく、個人の習慣と集団の慣習を行き来するような関係性として捉えていきたい。(図1)このような関係性を保ちながら、園生活を送るためには、保育者の働きかけが1つのアプローチとなるであろう。子ども達が慣習(園のルール全てに当てはまらなくても)の枠に入らなくても、興味関心が持てれば自然と慣習に入ることが出来る。つまり、習慣が身に付くのである。

したがって、筆者の考える「生活」とは、日常

生活の自立に関する個人の習慣を持ちながらも、集団生活への興味関心を抱く（保育者の働きかけが1つのアプローチ）ことで慣習への参加を可能とし、新たな習慣が身に付いていくことと定義したい。このような集団生活における日常的なパターン行動を繰り返し経験することで、子ども自身が「みんなと〇〇をしたい」気持ちを抱けるようになり（共通の「生活」感覚を確立）、一人ひとりが園生活の慣習を大切にすることを意識を持ち、より良い生活を創ることへと繋がるのである。

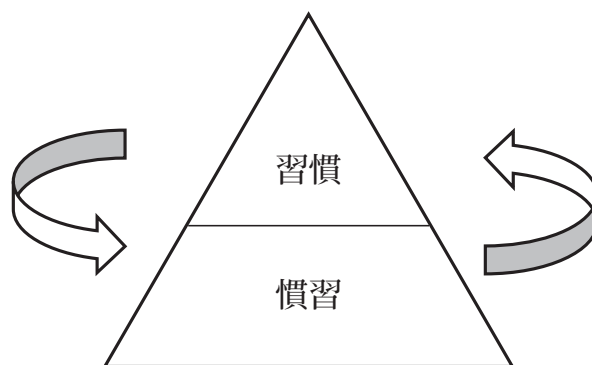


図1 「習慣」と「慣習」の関係性

#### 4. 保育現場の実態

##### 【筆者が担当している年長児クラスの概要】

- ①園児数：48名
- ②クラス人数：1組24名，2組24名
- ③保育体制：・担任2名 ※有資格者
  - ・AT（アシスタントティーチャー）  
1名 ※有資格者
  - ・ST（サポートティーチャー）1名
  - ・ALT（アシスタントランゲージ  
ティーチャー）1名

##### 【主な生活の流れ】

時間	幼稚園児	保育園児
7:15～		順次登園，早朝預かり
8:30～9:00	順次登園，身支度 朝の仕事（出席カードにシールを貼る，コップを出す）	
	順次自由遊び	
10:00	片付け，朝の会	
10:30	活動	
11:30	昼食準備，昼食	
12:30	順次自由遊び	
13:30	片付け，帰りの会	
14:00	降園	
14:30		預かり保育，おやつ
～18:00		自由遊び，順次降園

筆者は年長児のクラス担任をしており、主に教育時間（9時00分～14時00分）を子ども達と過ごしている。主な生活の流れは示した通りだが、子ども園の年間行事予定表には、年長独自の活動が組み込まれており、毎日同じような流れで生活を送れていないのが現状である。

例えば、2週間に1回程度「森の活動」がある。森の活動は徒歩で15分程の場所にある北進の森で約1時間程度過ごしている。森の活動がある日には、登園してから9時00分には片付けをして朝の会、9時30分には園を出発して、森へ向かうのである。また、1時間程度遊んだ11時過ぎには片付けを行うが、開放的な場所でそれぞれが遊んでいたこともあり、森からの帰りが出遅れてしまう。園に到着後は、少しでも多くの昼食時間を確保するために、すぐに子ども達の昼食準備と同時進行で配膳を行うが、慌ただしい状況で配膳に夢中になっている保育者は子ども達を見切れず、子ども同士のトラブルも起こりやすい時間帯となっている。

さらに1例を挙げると、月に1度「ALT（英語の時間）」がある。町内のALTが来園し、遊びながら英語に親しみが持てるような活動時間を設けている。各学年との調整が必要であるが、開始時間は早くて9時00分からであり、登園した直後、もしくは他クラスに混ざってALTの活動に参加しているのである。登園してまもない時間に活動がスタートするので、子ども達の様子を把握出来ないまま活動に入ってしまう、活動に入りながら視診することもある。

このように、活動によって園での生活の流れは異なり、さらに年長児のカリキュラムからは毎日を安定した生活リズムで過ごすことは難しいのではないかと、学年内で子ども達の姿を考慮した生活の進め方を検討して実践してみた。1つ目の事例に挙げた「森の活動」では、給食前の「子ども達の動き」を変えてみた。これまでは森から帰園後、すぐに給食準備へ動いていたが、気持ちを落ち着かせるために1度集まる時間を設けた。

この集まりは、森ではどのような活動を行ったのかを写真を見ながら友達と振り返ることで、出来事を共有する時間となり、次回の森への繋がりを持つことにもなる。また、集まっている時間の裏側で給食の配膳準備を進めることで、保育者は給食準備を始める子ども達へ目を向ける余裕が生まれ、落ち着いた気持ちで給食の時間を迎えることが出来たのである。保育者が忙しくなく過ごしている雰囲気子どもに見せないこと、森で高揚した気持ちを落ち着かせる時間を設けることが、安定した生活を生み出すことに繋がったのではないだろうか。これまでの慌ただしい生活に比べると進歩した部分ではあるが、これが子ども達にとって本当にふさわしい生活となったのだろうか。

次いで、上記とは異なる視点で考察したい。「生活を営む」のは誰なのかということである。もちろん園生活を営むのは子どもである。しかし、保育者が慌ただしく感じている要因には、保育者が無意識のうちに生活の主体となり、子ども主体の生活ではなくなっているのではないかと、先の事例の通り、昼食前、子ども達を長時間待たせないようにと、保育者の配膳の準備と並行して昼食準備（机に箸を用意して配膳される給食を取りに行く）をしている。ここで保育者の慌ただしさが生まれるのは、昼食前後の活動内容によって、時間に追われる生活となってしまう、結果的に子ども主体から保育者主体の生活へと変化せざるを得ない状況を生み出しているのではないだろうか。「生活を営む」のは誰なのかに立ち返ると、保育者主体の状況を生み出す活動の組み方ではなく、まずは、生活とは何か原点に立ち戻ることが必要なのではないかと。

#### 4. 園全体や学年内の「生活」の認識と整理

今一度「生活」とは何かに立ち戻りたい。「生活」とは、日常生活の自立に関する個人の習慣を持ちながらも、集団生活への興味関心を抱く（保育者の働きかけが1つのアプローチ）ことで慣習への参加を可能とし、新たな習慣が身に付いてい



くことと定義していた。このような集団生活における日常的なパターン行動を繰り返し経験することで、子ども自身が「みんなと〇〇をしたい」気持ちを抱き（共通の「生活」感覚を確立）、一人ひとりが園生活の慣習を大切にす意識を持ち、より良い生活を創ることへと繋がるのである。

先のエピソードでは、子ども達が園生活に対してどのように感じているのかという視点がなく、保育者が「子どもを見切れていない」「慌ただしい」「喧嘩が起こってしまう」といった大人視点の内容となっていることが分かる。つまり、保育者の生活に対する意識が薄く、意図的な働きかけがないまま過ぎてきたことで、集団生活への興味関心を抱ききっかけを奪い、子ども達一人ひとりの慣習のまま停滞していたのである。

目の前の子ども達が、「習慣」と「慣習」のサイクルを獲得するためには、個人の習慣だけでなく、自ら集団の必要性を感じ、集団生活を送る中で、どのような集団で在りたいかを友達と模索す

ることで、集団の慣習を創り上げる必要がある。さらに、そこで新たに気付いたことや考えたことが、再び個人の習慣へと繋がり、無理なく「習慣」と「慣習」を行き来することが可能となるだろう。しかし、これらを実現するためには、子ども達だけでなく、生活者としての保育者の働きかけが必要である。それに気付くためには、まずは園全体や学年内の「生活」に対する認識の整理が必要であると考えた。そこで、チーム内(5名の保育体制)の保育者達は現状をどう捉えているのか、「生活」に対してどのような意識を持っているのかを整理するために、「生活」に関するアンケート調査を行った。

## 5. 自由記述式のアンケート調査

### 5-1. 調査結果

#### 【対象者】

年長児クラスの保育者（筆者、ALTを除く）

担任：1名、AT：1名、ST：1名

表1 質問項目

	質問項目
①	「子どもの主体性」がなぜ大切だと思いますか
②	保育者は、子どもの主体性を育むために、どのように関わるのが大切だと思いますか
③	集団の中で「自分達はこうありたい」と思えるようになるには、どのようなことが必要だと思いますか
④	(森の活動後などの) 昼食前に、喧嘩が起きやすいのはなぜだと思いますか
⑤	園生活を送る中で、「慌ただしい」と感じることはありますか
⑥	⑤であると回答した方に質問です。なぜそう感じたのでしょうか
⑦	集団生活の中で、友達とびを共有するためには何が大切だと思いますか
⑧	子ども達が集団へ興味を抱くために、大切なことは何だと思いますか
⑨	子ども達が集団の必要性を感じるためには、何が大切だと思いますか
⑩	子ども達が自らより良い生活を作り出すために、大切なことは何だと思いますか

	回答内容
①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言われてやるより、自分で考えて自分で決めたことには意欲もあるし責任も出てくるから</li> <li>・自分でやりたいことを見つけて、方法を考えて達成する中で、沢山の人や物や知識に触れるため</li> <li>・特になし</li> </ul>
②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意見を言いやすい環境, 小さな声も丁寧に</li> <li>・先生が各々で必要な関わりがどこにあるのか, それはどの程度必要なものなのかよく観察し関わること, 先生も大切な環境の1つという意識</li> <li>・特になし</li> </ul>
③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仲間意識, 繋がり, 目標</li> <li>・クラスは先生のものではなく, 君たちのものという意識</li> <li>・特になし</li> </ul>
④	<ul style="list-style-type: none"> <li>・疲れている, 時間に余裕がない, 人がバラけている</li> <li>・大人の振り返りの弱さ, 大勢(大人)の目的が1つのみになってしまうゆえの時間の使い方のずれ</li> <li>・空間の時間, 疲れ, 空腹</li> <li>・特になし</li> </ul>
⑤	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員が「ある」と回答</li> </ul>
⑥	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行事ややらなきゃ行けないことが多い? 子ども達の人数, 成長段階がそれぞれ</li> <li>・やらなければ, やらせなければいけないという固定概念</li> <li>・特になし</li> </ul>
⑦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それまでの過程, 役割</li> <li>・失敗もトラブルも含めた実体験, 成功体験</li> <li>・特になし</li> </ul>
⑧	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループやクラスなどの仲間との楽しい経験</li> <li>・なぜ興味を持たないのか原因追求のみにならないこと, 楽しいかもよ? やりたくなったらやってみよう!等直接的な行動や言葉掛け, 友達同士の関わり</li> <li>・特になし</li> </ul>
⑨	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思いやり, 楽しさ</li> <li>・生活することの意味を意識すること</li> <li>・特になし</li> </ul>
⑩	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2名が「環境」と回答</li> <li>・特になし</li> </ul>

## 5-2. 考察

聞き取り調査では、大きく3つの視点を読み取ることが出来た。

### 1, 子どもが生活の主体者である意識（質問項目①～③）

#### ①, ③

「自分で考えて自分で決めたこと」「自分でやりたいことを見つけて、方法を考えて達成する」「先生のものではなく君たちのもの」との回答があったことから、子どもが生活の主体者である視点を含んでいた。また、「意欲もある」「沢山の人や物や知識に触れる」などの興味関心の対象が集団生活へ向く可能性も示唆された。

#### ②

本来であれば子どもが生活の主体者である意識を読み取ろうとした質問項目であったが、「意見を言いやすい環境、小さな声も丁寧に」「先生が各々で必要な関わりがどこにあるのか、それはどの程度必要なものなのか、よく観察し関わること、先生も大切な環境の1つという意識」という、子どもの主体性を育むためには、保育者の意図的な働きかけが必要であることが述べられていた。

### 2, 大人視点の意識の有無（質問項目④～⑥）

園生活を送る中で、全員が「慌ただしい」と感じており、「やらなきゃいけないこと」という大人視点の回答がありつつ、一方で「やらなければ、やらせなければいけないという固定概念」という保育者の意識に関する回答が含まれていた。他にも、「子どもの成長段階がそれぞれ」という一人ひとりのペースを気に掛ける視点や、「大人の振り返りの弱さ、大勢（大人）の目的が1つのみになってしまうゆえの時間の使い方のずれ」という課題が大人にあるという反省的視点が述べられていた。

### 3, 保育者の意図的な働きかけの必要性（⑦～⑩）

「生活することの意味を意識すること」という生活を営むのが子どもである回答や、「グループ

やクラスなどの仲間との楽しい経験」「なぜ興味を持たないのか原因追求のみにならないこと、楽しいかもよ？やりたくなったらやってみよう！等直接的な行動や言葉掛け」といった保育者の意図的な働きかけも1つの手段であることが窺われた。

## 6. まとめ

本稿では、筆者の考える「生活」を定義し、保育現場から見た筆者の課題を、学年内の保育者達はどう捉えているのかについて、自由記述式のアンケート調査を行い、その結果から生活者としての保育者のあり方を考察してきた。

筆者は、小川（2010）の「生活」に対する考え方をもとに、「生活」とは、日常生活の自立に関する個人の習慣を持ちながらも、集団生活への興味関心を抱く（保育者の働きかけが1つのアプローチ）ことで慣習への参加を可能とし、新たな習慣が身に付いていくことと定義していた。また、「習慣」と「慣習」のサイクルを獲得するためには、個人の習慣だけでなく、自ら集団の必要性を感じ、集団生活を送る中で、どのような集団で在りたいかを友達と模索することで、集団の慣習を創り上げる必要がある。さらに、そこで新たに気付いたことや考えたことが、再び個人の習慣へと繋がり、無理なく「習慣」と「慣習」を行き来することが可能であることを本研究で指摘した。

教育理念である『自らを生きる』を柱に、子ども主体の生活を意識していたはずであったが、「慌ただしい」「やらなきゃいけないこと」と筆者も含めて大人が軸となってしまう場面が生まれている。子ども主体の園生活とは、どのようなものを今一度考え直す必要があるだろう。しかし、「やらなければ、やらせなければいけないという固定概念」といった実践に対する反省的な意見もあり、保育者の意識に対する課題が浮き彫りとなった。さらに、集団生活へ興味関心が抱けるように、「グループやクラスなどの仲間との楽しい経験」を積んだり、保育者の意図的な働きかけと

して「直接的な行動や言葉掛け」の必要性が示唆された。

保育現場は、目まぐるしい毎日を送っている。子ども達が園生活の主体者として集団生活を送るために、生活者である保育者は何が出来るのか、どうあるべきなのかを日々の取り組みを振り返りながら、丁寧に考察していくことが重要であろう。

今後は、先行研究に学ぶとともに、実践の具体的な把握と課題を明確にしたい。

## 文 献

- 1) 倉橋惣三（高野義夫）『倉橋惣三選集』第1巻  
幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル2008年、  
フレーベル館、p23
- 2) 厚生労働省「保育所保育指針解説」、2018年、  
pp.12～13
- 3) 文部科学省「幼稚園教育要領」2008年、p1
- 4) 文部科学省「教育基本法」2006年、第11条
- 5) 内閣府「幼保連携型認定こども園教育・保育  
要領解説」2018年、p25
- 6) 7) 8) 小川博久「保育援助論」2010年、萌文  
書林、pp.29～32